

2021年3月6日かざぐるまデモ

フクシマから10年

多和田葉子

セシウムの半減期はどれくらい長いのか。プルトニウムは半分に減るまでどれくらいかかるのか。2万4千年？ウランは45億年必要だ。私はこんなことを想像するに耐えず、目を閉じる。反抗するように、どの道これからずっと汚染されたままなのだと言ってみる。「これからずっと」というのは「永久に」ということだ。永遠を想像するのは具体的な高い数字よりも耐えられる感じがする。それで私は永遠の中に逃げ込む、永遠は誰も責任を負うことのない時間だ。ここでは私はなにも行動を起こさなくてもいい、だって永遠ではどの道すべてが遅すぎるからだ。そして私は自分のうちの中に潜り込んで姿を消す。甘い哀愁に満ちた、私一人のために安全が確保された生活の中へ。

でもこの不安な気持ちを呼び起こす数字を直視するとしたら、どうだろうか。気持ちの悪いセシウムだのプルトニウムだのという言葉が創作の中に取り込んでみたらどうなるのだろうか。約3か月前に生誕100年を迎えたはずのパウル・ツェランは、医学や化学分野の用語を自分の作品に入り込ませた。文明の大惨事*¹のことを書こうとして、それができた。

記憶の半減期はどれくらいなのだろうか。

「核」が2011年に溶けた時、私たちは深く慄き、奈落の底に落ちるほどの不安を覚えた。そしてそれは放射能に対する恐れだけではなく、それ以上のものに対する恐れだった。あの時、一体どんな「核」が溶けてしまったのだろう。持続した日常に必要な信頼の「核」、それがなければ毎日仕事に取り組んだり、人間関係を温めていったり、または家や学校、会社などを作り上げていったりする力をもてないような、そうした信頼の「核」が溶けたのだった。原子力のからくりはいつでも生の意味を破壊することができる、そしてそれゆえに、その存在だけで私たちを内側から汚染していく。

私の記憶の半減期はどれくらい長いだろうか。住む人のいなくなった福島町の町に事故から2年後に訪れた時、私はある小さな新聞販売所で2011年3月11日付の新聞が、どこにも配達されることなく高々と積み上げられているのを見た。これらの新聞はこれからまだ24000年、誰にも読まれることなく、誰から気づかれることもなく置いておかれるのだろうか。

人は恐ろしい光景だけを頭に抱いて生き続けることはできない。それを抑圧していくために、人はそれらを黒いプラスチックの袋に詰めていく、またはこっそり海にふるい落として流してしまう。太洋は、死をもたらすほど汚染された汚れ物を洗うための巨大な洗濯機なのだというのが。そんなはずはな

い。世界の海は 460 万年前から次第に今のような形となってきたとても感性の鋭い神経叢だ。海水は苦しみながらも常にバランスをとろうと努力する。それでも汚染の速度がどんどん高まっている。

私たちがなにも言わずに黙っていることで、そうしたものがなくなるわけではない。一度でも外へ出された有害なメッセージは、世界に留まる。それはとてもゆっくりとしか減っていかない、その減退の速度は、半減期が示しているように、どんどんゆっくりとなるのだ。私たちはこの前の大惨事による後遺症にこれから何度も驚かされていくことだろう。それに対処してただけで手いっぱいになってしまうかもしれない。なのにどうしてこれ以上、破壊のからくりを動かしていくつもりなのだろう。もっと利益を約束するから、みかけの経済成長を約束する輝きや快感をもたらしてくれるから、慰めや気分転換のためのエネルギーも作り出してくれるから？ でもそのために私たちの生は、意味のない待機時間へと転換されてしまう、半減期を数えるだけの待機時間へと。私たちはすでに借金をしているのだ。生を破壊するからくりの発電所を、私たちはすぐにも停止しなければいけない。

* 1) 訳注：パウル・ツェランはユダヤ系だったため両親とともに強制収容所へ入れられた

(翻訳：梶川ゆう)